

社会科教室 131号

平成5年度

社会科教育研究のあゆみ

香川県小学校教育研究会社会部会

香川県社会科教育研究会



目 次

会長あいさつ	1
定例研究会一覧	2
6月定例会	3
7月定例会	4
9月定例会	5
10月定例会	6
1月定例会	7
夏季研修会	8
秋の大会	9
浅野小学校提案	10
香社研提案	19

新しい学力観から新しい学力形成へ

香川県小学校教育研究会社会部会

香川県社会科教育研究会

会 長 岡 田 弘 治

1 授業改善は素朴な疑問から

従来、社会科の授業を実践しながら、次のような疑問をもっていた。

- ・ 子どもはそれぞれにさまざまな興味や願いをもっている。しかし、同じ学習内容を、同じ過程で学習するばかりでよいのだろうか。
- ・ ある日突然、子どもは教師から教材を与えられて学習をする。子どもの意識が続くような学習がなくてよいのか。
- ・ 子ども一人一人のわかり方が違うのに、教師が決めた操作や表現に統一して自分の学習スタイルを生かせずにいる子を無視してよいのか。

数えあげると限りないこれらの疑問に正面から取り組んでくれた香社研の会員の方々に頼もしさを感じた。

2 浅野小学校の実践を基盤において

香川町立浅野小学校で夏季研修会と秋の研究大会が開かれ、新しい提案と提案授業が公開された。特に秋の研究大会では多様な操作をくり返し行い、子どもの認知過程を追う方法がとらされた。しかも、11学級の授業形態がすべて異なっていたため、授業の深まりと広がりが同時にわかり感銘を与えてくれた。

研究大会には大勢の先輩の方々もかけつけてくださり、改めて香社研を温かく見守ってくれていることを実感し感謝した。

さらに、各郡市で行われた定例研究会では、典型学習と学習材の取り扱い、従来の個別を重視する学習から、認知スタイルや学習スタイルを生かし、個性を重視する学習も公開され論議をよんだ。このように、浅野小学校での実践を基盤において発展していることによるこびを感じた。

3 今後の課題について

新しい学力観にもとづいて具現化する方途をさぐってきた。しかし、今からは新しい学力形成の視点に立っての実践が必要である。それは、池内先生がおっしゃる「子どもの認知過程を追求する上で、思考力・判断力・表現力などの能力は、知識・理解と深い関係をもって育成する」ことであろうと思われる。その意味で研究実践が方法論にかたよることなく、教師による内容研究の深さともおいにかかわってくることである。

平成5年度 定例研究会一覧

6月定例会・・・香川（浅野小学校）

6月19日

单元名	授業者	提案者	指導者
2年「生きものランドをつくらう」	湯浅 良子	小坂真有美	林 靖子先生
4年「水は自然のおくりもの」	上田 美穂	小比賀隆之	高橋 英次先生
6年「源頼朝と鎌倉武士」	津郷 美佳	宮田 一真	岡根 淳二先生

7月定例会・・・仲善，綾歌（農改センター）

7月 3日

	单元名	提案者	指導者
仲善	「室町の武士の文化を中心に」	川田 真司（仲南西小）	山崎 敏和先生
綾歌	「天下の統一」	高吉 直之（岡田小）	

9月定例会・・・高松（川添小学校）

9月18日

单元名	授業者	パネラー	指導者
3年「変わってきた川」	森 正彦 榎 貴志	池田孝徳(附小), 山野正登(附小) 喜多英彦(附小), 授業者	林靖子先生

10月定例会・・・香川（浅野小学校）

10月 2日

单元名	授業者	指導者
1年「浅野のおかのおはなしをつくらう」	森 智子	渡邊久仁子先生
3年「小橋をつくる町 香川」	土居 映子	旅田 敏弘

事前研1・・・・香川（浅野小学校）

10月23日

◎ 秋の大会の指導案検討

事前研2・・・・香川（浅野小学校）

10月30日

◎ 秋の大会の指導案検討

1月定例会・・・丸亀，坂出（附属坂出小学校）

1月22日

	单元名	提案者	指導者
丸亀	丸亀市のうづりかわり	大西直人(附小), 山野正登(附小)	猪熊 一生先生
坂出	政治のはたらき	丸尾浩一(附小), 吉田和弘(附小)	

2月定例会・・・大川，小豆（附属高松小学校）

2月 5日

	单元名	提案者	指導者
大川	地域の発展につくした人たち	白澤 一修(小豆小), 野瀬 明子(富田小), 藤岡 正剛(引田小)	八木育夫先生
小豆	地域の発展につくした人たち	佐々木 誠(西小), 梅谷 旬(大部小)	

6月定例会（浅野小）の研究内容

1 日時 6月19日（土）14:00～16:30

2 場所 香川町立浅野小学校

3 研究授業

单元名 2年「生き物ランドをつくろう」

授業者 湯浅 良子 （浅野小）

提案者 小坂真有美 （浅野小）

指導者 林 靖子先生 （香川県教委）

单元名 4年「水は自然のおくりもの」

授業者 上田 美恵 （浅野小）

提案者 小比賀隆之 （浅野小）

指導者 高橋 英式先生 （高松市教委）

单元名 6年「鎌倉幕府と武士のくらし」

授業者 津郷 美佳 （浅野小）

提案者 宮田 一真 （浅野小）

指導者 岡根 淳二先生 （観音寺市教委）

4 提案内容

研究主題 「自ら問をもち、追求する児童を求めて」
－体験や活動から表現へとつなぐ社会科学学習－

5 指導内容

2年・価値ある教材の選択が大切。生き物をつかまえた時の一人一人の思いや願いがその子の課題である。知る思考力ではなく気づく思考力を大事にし、自然（捕まえた場所）と何度もかかわっていく中で気づきを持たせたい。科学的な目は図鑑の中からではなく体験の中から生まれる。そして、地域のよさ自分のよさに気づかせる浅野にかかわる生活科をつくるのが大切である。

4年・社会のいろいろな仕組みを知っていくのが4年生の学習である。ここでは、水ということで見学したり調べたりすることが大切である。近くで、何度も見れる所がよいとすれば東部浄水場が核になるだろう。見たこと・聞いたことをどんどん書き込んでいく。それを、見出しをつけたカードに整理し、交流することによって友だちのよいところを取り入れて増やしながら深めていくことが大切である。

6年・子供の意識を大切にしている。自分が気になる武士から問いの出発があった。論証を深めるために、適切な援助活動がなされた。（1学習の進め方・見通しを持たせている。2児童の言葉を具体化する発問がなされていた。3仲間わけの方法として一つを取り上げ同じものをとらえさせた。4類推をより確かにするために紙芝居を取り入れて温かい援助がなされた。）これからの課題として考える時間を保障し、児童が変容する授業を望んでいる。

7月定例会（仲善・綾歌）の研究内容

- 1 日時 7月3日（土）14:00～16:30
- 2 場所 満濃農改センター
- 3 提案

（仲善）

- ◎香社研テーマと仲善社研テーマの接点について
- ◎問いかけ、思考、判断させる援助について
- ◎我が国の文化・伝統の内容の系統について

《ビデオ公開》

単元「室町の武士の生活」	善通寺市立東部小学校	高橋 義徳
単元「天皇と貴族の世の中」	多度津町立多度津小学校	森 昭二
単元「頼朝と鎌倉武士」	琴平町立琴平小学校	岩崎 保雄

（綾歌）

- ◎子どもが創る歴史学習・子どもたち一人一人が自分なりの人物像をもち、その時代をイメージすることができる。
- ◎個を生かす学習の保障・「学習タイプの発見と教師の対応」
「子どもの評価を分析した教師の児童理解」

《ビデオ公開》

単元「天下の統一、信長・秀吉・家康」	綾歌町立岡田小学校	高吉 直之
--------------------	-----------	-------

（指導）山崎 敏和先生（義務教育課）

4 討議・指導内容

- ・雪舟を中心としたイメージマップが時代相をとらえさせるうえでおもしろい実践だ。
- ・室町時代の文化を見ていくこととしたが雪舟だけで通すとまわりが見えなくなるのではない。応仁の乱なども取り上げたい。
- ・毎時間行った反省カードの活用によって、標準偏差等を出すことができ高まりがよくつめた。
- ・ある人物がしたことと性格的なことをつないで、人物像が詳しくなるようにしたい。
- ・小学校で表現力・思考力・判断力をしっかり身につけておかないと中学校につながっていない。
- ・これからの学習指導の課題として
「指導要領改訂の主旨とその背景の見直し」
「新しい学力観に立つ教師の発想の転換が必要」子供観・指導観・評価観の転換
- ・新しい学力観から、価値ある教材とは何かを考えること。
- ・どうやって力を身につけていくのか、学習の効果ばかりではなく、学習展開の過程を大切にしたい。
- ・協力体制をつくる。T・T方式を取り入れた指導を考えてほしい。
- ・国際社会に生きる日本人として、人物中心の歴史学習の充実を図ってほしい。

9 月定例会(川添小)の研究内容

1 日時 平成5年9月18日(土) 14:00~16:30

2 場所 川添小学校

3 研究授業

单元名 3年「変わってきた川添」

授業者 森 正彦, 榎 貴志(川添小)

司会者 徳田 仁司(一宮小)

パネラー 池田 孝徳(附高小), 喜多 文彦(花園小)

山野 正登(城坤小), 森 正彦(川添小)

榎 貴志(川添小)

指導者 林 靖子先生(香川県教委)

4 提案及び討議内容

テーマ「地域社会に対する愛情を育む社会科の授業」

① 学習材としての教材を開発する

子供が地域の教材を活用して直接体験の中で調べていくことが大切である。しかし、子供の調べたことは素材のままである場合が多いので、学習材となるよう援助・支援していかなければならない。

② 自分らしきが出せる

自分らしい思考や表現のスタイルが生かせてはじめて問題解決の力を獲得することができる。子供自身が調べる対象を設定したり、表現方法を考えたりできるよう援助・支援していくことが必要である。

③ 空間と時間の視点で地域を見る

空間意識と時間意識の両面を育てることを意図して単元構成を工夫した。地域の事象を調べ、昔と今で変わったもの変わらないもの、変えてはならないものを知り、絶えずこの2つの視点から地域を見ていくことが大切である。

④ 人々の生き方や心根を探る

地域のために尽くした人々の目で地域をながめ、その人の考えや行為を自分でたどることも大切である。そういった先人の心根を探ることで、子供の感性が呼び覚まされ、愛情が深まると考えた。

10月定例会（浅野小）の研究内容

1 日時 10月2日（土）14:00～16:30

2 場所 浅野小学校

3 研究授業

单元名 1年 「浅野の丘のおはなしをつくろう」

授業者 森 智子 （浅野小）

指導者 渡邊 久仁子先生 （辻小学校教頭）

单元名 3年 「小菊をつくる町香川町」

授業者 土井 映子 （浅野小）

指導者 旅田 敏弘 （附属高松小）

4 提案内容

研究主題 「自ら問をもち、追求する児童を求めて」

—体験や活動から表現へとつなぐ社会科・生活科学習—

5 討議、指導内容

1年・長期的な継続の難しさがある中で意識がうまく続いている。記録の積み上げがすばらしい。

- ・育てる活動に、自己認識を重ねるすばらしい発想に感心した。子供の表現の中には自分のこだわりが発揮されていた。ここで学習した自己認識の芽は、2月の自分の成長の学習につながっていくものである。朝顔に教わったことを大切にしながらきっと自分にいかせていけるものと思う。

- ・社会認識を低学年で身につけることは、大きく考えず、だれかに知らせるといった活動の中で育てられるものである。種のプレゼント等、活動の工夫で広がりがもてる。

- ・表現のすばらしさに驚いたが、表現の中に驚き、喜びなどの心情が表れることが重要である。

3年・子供の多様な表現方法を保障していたことは、子供の個性を伸ばすことができていたのでないか。

- ・教師は、子供に情報提供する援助者に徹しており、子供中心の学習が展開されていた。また、教師が提供した情報も子供の中に小菊をつくっている農家の人々の苦勞を描いていくために有効であった。

- ・今後、より子供中心の授業を展開するために、認知のタイプの違うグループ編成や学習材の子供の発想を学習にどのように取り入れていくか考えていかなければならない。

1 月定例会（坂出・丸亀）の研究内容

1 日時 1月22日（土）14:00～16:30

2 場所 附属坂出小学校

3 提案

丸亀「表現活動を重視した社会的思考力の育成」

3年「丸亀市のうつりかわりー丸亀の昔はかせになろうー」

授業者 大西 直人 （城乾小）

提案者 山野 正登 （城乾小）

坂出「教材の価値と社会的思考力の育成」

6年「政治のはたらき」

授業者 丸尾 浩一 （加茂小）

提案者 吉田 和弘 （林田小）

指導者 猪熊 一生先生（坂出市教育委員会）

4 討議・指導内容

- ・ どうして学習材・典型材と分けるのか、何が典型材、学習材なのか簡潔に表現してほしい。
- ・ 学習材とは、子供が興味をもって取り組めるもの。要件として「地域性、生活性、文化性」があげられる。学び方として操作方法の工夫が大切である。
- ・ 典型材とは、一定の概念を得る教材を指している。要件として「思考を深化発展させる要素を含んだもの」があげられる。
- ・ 子供に学習権を与えるのが調べ学習であった。調べ学習だけではどこへ行き着くかわからないので、知識理解の形成を考えて、投げ入れ教材としての（典型材）が必要になった。
- ・ 典型材とは、香社研の財産である。駅の昔と今とを比べるといった取り組みがそうである。しかし、そこには、操作の方法が画一的であるという問題点があった。地域教材であれば操作がたくさん出てくる。子供の能力に応じた調べが可能である。
- ・ 学習材・典型材と分けると、教材開発に時間がかかる。子供の立場で考えれば直感で考えるのであって用語ではないのではないか。
- ・ 目標の4項目は、決してばらばらではないはずだ。関心・態度、思考・判断、表現を通して知識理解を得るという一連の流れがあるのではないか。

指導

- ・ 香社研は、新たな理論構築をしているのを痛切に感じた。ただ、具体的な変化を明確にする必要があるのではないか。例えば、学習材（特殊性）典型材（普遍性）・支援・社会的思考力といったキーワードをつかって内容を分けたり図式化する方法である。そして、学習過程にどう位置づけるかという論を明確にしていきたい。
- ・ 教材開発の視点として、◎基礎・基本とは何か◎社会的事象が多面的に見えるか◎社会的事象と人間とのかかわり・相手の立場を考える。
- ・ 表現力育成の視点として、◎とらえを明確に◎表現する主体をどう育てるか◎受容する側の集団の育成◎教師の支援の在り方◎表現の場や機会の設定の在り方◎表現の成果の取り上げ方。
- ・ これからは、学力形成の具現化が望まれる。新しい学力観を軸として、新しい指導観に立つということであるが、その方法として、観点別の学習状況をもとに具体的評価から変えていくことも大切である。

7月29日(木) (進行・・・浅野小 石川恵美子教頭)

時刻

内

容

9:15

日程説明

9:30

浅野小提案 長谷 民子(浅野小)

9:45

全体授業

5年「日本の水産業に夢を」

授業者 生田 久(浅野小) 記録者 黒川 誠司(十河小)

10:40

模擬授業

学年	授業者・提案者	司会者	記録者	協力者
生活科 ① 2年	湯浅 良子(浅野小) 小坂真有美(浅野小)	黒川 紀子(高・川岡小)	森 智子(浅野小)	千葉 雅巳(直島小) 川田 康代(大野小) 中田由紀恵(香南小) 高重 淳(大野小) 清谷由美子(川東小)
3年 ②	稲毛 妙子(浅野小) 土居 映子(浅野小)	亀井 彰(坂・府中小)	真鍋 直子(浅野小)	前田 宏之(香南小) 長岡 伸幸(川東小)
4年 ③	上田 美恵(浅野小) 小比賀隆之(浅野小)	樋口 昌樹(丸・城東小)	川田 容子(浅野小)	小西 俊毅(上西小) 橋本 英敏(直島小)
5年 ④	森川 美香(浅野小) 生田 久(浅野小)	高田 宏隆(大・相生小)	小西 裕二(浅野小)	小原 敏昭(大野小) 池田 誠(香南小)
6年 ⑤	津郷 美佳(浅野小) 宮田 一真(浅野小)	宮武 昭裕(三・桑山小)	山田 圭子(浅野小)	田岡 直樹(安原小) 市原 茂幹(直島小) 星野真理子(塩江小)

11:10

実践交流

学年	テーマ	司会者	提案者	記録者	指導者
低年 A	生活科	黒川 紀子(高・川岡小)	業天規根子(高・香西小) 大石 桂司(大・中央小)	中野 仁美(高・花園小)	渡邊久仁子 (三・辻小教頭)
3年 B	表現	亀井 彰(坂・府中小)	地下 浩文(坂・東部小) 野口 幸嗣(木・平井小)	沼田久仁子(坂・東部小)	植松 勝 (高・四番丁小教頭)
4年 C	思考	樋口 昌樹(丸・城東小)	池内 右典(丸・城乾小) 藤田 順也(小・星城小)	田口美代子(木・庵治小)	古沢 博美 (高・二番丁小教頭)
5年 D	個別化	高田 宏隆(大・相生小)	松村 和仁(大・多和小) 臼杵 優(三・詫間小)	亀井 健男(大・白鳥小)	古市 聖治 (大・富田小校長)
6年 E	評価	宮武 昭裕(三・桑山小)	高橋 克佳(三・神田小) 高橋 義徳(善・東部小)	佐柳 仁(仲・四箇小)	岡根 淳二 (観音寺市教委)
総合 F	個性	香川 佳和(綾・栗熊小)	喜多真登美(高・多肥小) 田中 直樹(綾・飯北小)	池内 洋子(綾・西分小)	大西 孝典 (三・財田中小校長)

12:30

昼食・休憩

13:20

開会式

13:45

研究発表 本部提案「新学力観に立つ、社会科授業」
～ 「問い」と「論証」の調べ学習 ～
思考操作の深化を図る社会科学習を求めて 提案者 池田 孝徳(附属高松小学校)

14:15

講演「社会科における思考力の育成」
講師 筑波大学助教授 高野 尚好先生
記録者 畑 美幸(日新小)

16:20

閉会式

研究主題 自ら問いをもち、追究する児童を求めて 一体験や活動から表現へとつなぐ社会科・生活科学習一
日 程 (進行 浅野小 石川 恵美子教頭)

八・三〇	九・〇〇	九・四五	一・〇〇	一・〇〇	二・〇五	二・五〇	三・一五	四・〇〇	五・〇〇	五・一〇	六・三〇
受付	提案授業Ⅰ	分科会	移動	講演Ⅰ	昼食 アクシオン	開会行事	提案授業Ⅱ	研究発表	休憩	講演Ⅱ	開会行事

提案授業Ⅰ

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
単元名	浅野のおかのおはなしをつくらう —あきのあさのへどうぞ—	子どもひょうげまつりをしよう	小菊をつくる町香川町 香川町の人々のくらしを変えた道	浅野の土地を開いた 矢延平六	伸びゆく日本の物流 —日本の物流新時代— —空飛ぶ香川の特産品—	マイホームタウン 香川 —わたしたちのくらしと政治—
授業者	森 智子	湯浅 良子	土居 映子 稲毛 妙子	小比賀隆之 上田 美恵	生田 久 森川 美香	津郷 美佳 野土 裕彦
協力者	千葉 雅己 (香・直島小) 前川 直子 (三・辻小) 園方 森子 (大・志度小) 竹下 紀子 (綾・阿小)	中田由紀恵 (香・香南小) 香川 和美 (坂・東部小) 窪田 姉子 (木・平井小) 大林 博子 (仲・仲南東小)	前田 宏之 (香・香南小) 姫田 朋樹 (高・太田南小) 北分 秀樹 (丸・城東小) 柴田 英明 (三・豊浜小)	橋本 英敏 (香・直島小) 日下 浩子 (高・一宮小) 寺嶋 俊秀 (坂・中央小) 山下 敦 (仲・四条小)	小原 敏昭 (香・大野小) 松川 幸代 (高・亀阜小) 羽座 剛史 (小・土庄小) 大高 哲也 (大・造田小)	田岡 直樹 (香・安原小) 岡本 英孝 (高・築地小) 廣瀬 強 (大・石田小) 中西 昇 (綾・滝宮小)
記録者	中西 加代 (小・土庄小)	中村 航 (木・氷上小)	宮武 克明 (善・筆置小)	地井 泰弘 (丸・小手島小)	香西 謙二 (高・川島小)	高亀 弘吉 (三・比地小)

分科会

	1年・2年	3年	4年	5年	6年
責任者	川井千代子 (小・蒲生小校長) 藤田 昌示 (三・詫間小校長)	吉岡 浩一 (大・三本松小校長)	丸野 昭善 (綾・富原小校長)	寺島 司郎 (高・四番丁小校長)	北堀 豊清 (木・牟礼小校長) 丸野 忠義 (坂・岩里小中校長)
司会者	森口 訓行 (坂・瀬居小)	牧野 啓造 (綾・国北小)	竹田 具治 (大・丹生小)	藤本 一郎 (高・川岡小)	宮武 昭裕 (三・桑山小)
提案者	前 裕美 (坂・川津小) 篠田美津子 小坂真有美	波多 誠 (綾・国北小) 長岡 伸幸 (香・川東小)	山下 博 (大・三本松小) 前田 勝博	井上 泉 (高・四番小) 池田 誠 (香・香南小)	安藤 清和 (三・河内小) 宮田 一真
代表 質問者	若林菜穂子 (丸・垂水小)	森口 英樹 (木・田中小)	喜多 文彦 (高・花園小)	池田 茂樹 (小・福田小)	山田 泰二 (善・中央小)
記録者	金岡 太郎 (坂・岩里小)	櫻原 桂代 (綾・羽床小)	野瀬 明子 (大・富田小)	黒川 浩一 (高・亀阜小)	高橋 克佳 (三・神田小)
指導者	河津 孝 (坂・林田小校長) 渡邊久仁子 (三・辻小教頭)	大西 孝典 (三・財田中小校長) 楠松 勝	古市 聖治 (大・富田小校長) 梅木 正信 (仲・東部小教頭)	上川 敦生 (高・附高小副校長) 古沢 博美 (高・二番丁小教頭)	岡悦 淳二 (編音寺市教委) 川田 裕史 (高・二溪小校長)

研究発表

テーマ	「問いと論議の社会科授業の展望」
発表者	池田 孝敏 (附高小) 長谷 民子 (香・浅野小) 森 正彦 (高・川添小) 柴田 英明 (三・豊浜小) 川中 祥熙 (坂・東部小)

講演Ⅰ

演題	「学びの基本的課題を問う」
講師	高松短期大学 教授 池内 博 先生
記録者	橋本 隆 (高・太田小)

提案授業Ⅱ

6年(総合)	「浅野博物館をつくらう」	〔協力教授〕
学習指導者	長谷民子、宮田一真	
記録者	出石 由美(高・太田小)	
協力者	大橋けい子(高・亀阜小)、丸尾 浩一(坂・加茂小) 村上 露(大・丹生小)、福家 光洋(綾・山田小) 平川 博(三・大野小)	

講演Ⅱ

演題	「新学力観に立つ思考力の育成」
講師	文部省初等中等教育局 教科調査官 北 俊夫 先生
記録者	宮武 紀子(丸・郡家小)

浅野小学校提案

研究主題

自ら問いをもち、追究する児童を求めて
－ 体験や活動から表現へとつなぐ社会科・生活科学習 －

1 研究に当たって

本校では、学校教育目標である「豊かな心をもち、自ら学ぶ意欲と実行力のある児童を育成する」に基づいて、研究主題を「自ら問いをもち、追究する児童を求めて－体験や活動から表現へとつなぐ社会科・生活科学習－」と設定し、豊かな人間性を育て、児童の自主性・主体性を伸ばす教育の実践に努めてきた。この研究主題を設定した背景には、現在の社会事象、本校児童の実態があげられる。

さらに、今、学校教育では、学習指導要領が改訂され、児童が生涯にわたって社会の変化に対応し、主体的に生きていくための資質・能力の育成が強く求められている。そのために、「学ぶ意欲・関心・態度や思考力・判断力、表現力」を学力の基本として、新しい学力観に立った教育を展開していかなければならない。

そこで、香川県小学校教育研究会社会部会主題『新学力観に立つ社会科授業－「問い」と「論証」の調べ学習－思考操作の深化を図る社会科学習を求めて』を基に、調べ学習を展開してきた。

2 研究内容

(1) 新しい学力観に立つ社会科・生活科学習を目指す

新しい学力観の特色は、変化へ主体的に対応できる自己教育力の育成にある。それは、従来の教師中心の学習ではなく、児童中心の学習にしていくこと、また、一斉学習から脱却し、児童一人一人の特性を生かし、その子なりの生きる力としての資質・能力の育成に目を向けた生きて働く知識・理解・技能の土台作りを目指すことである。

(2) 個別化・個性化学習を目指す

新しい学力観では、知識・理解を中心とした認知的な側面を重視す

る学習から、情意的な側面を重視する学習への転換が求められている。そのために、児童一人一人が自分の豊かな考え方や生き方をもち、主体的に生きていく資質や能力を自ら獲得し、生涯にわたって、自分らしさを発揮できることを願い、個別化・個性化学習を目指したいと考えた。

(3) 体験や活動を生かす

児童の追究の意欲の強さは、「問い」のもち方にあると考えられる。児童が何かのきっかけでもった「問い」が「〇〇だろう」「〇〇ではないか」という論証に向けての見通しの基に調べ学習が続けられる。そこで、体験や活動を重視して、「問い」を「調べ問題」から「学習問題」へと発展させていきたいと考えている。

(4) 広い柔軟な思考力の育成を目指す

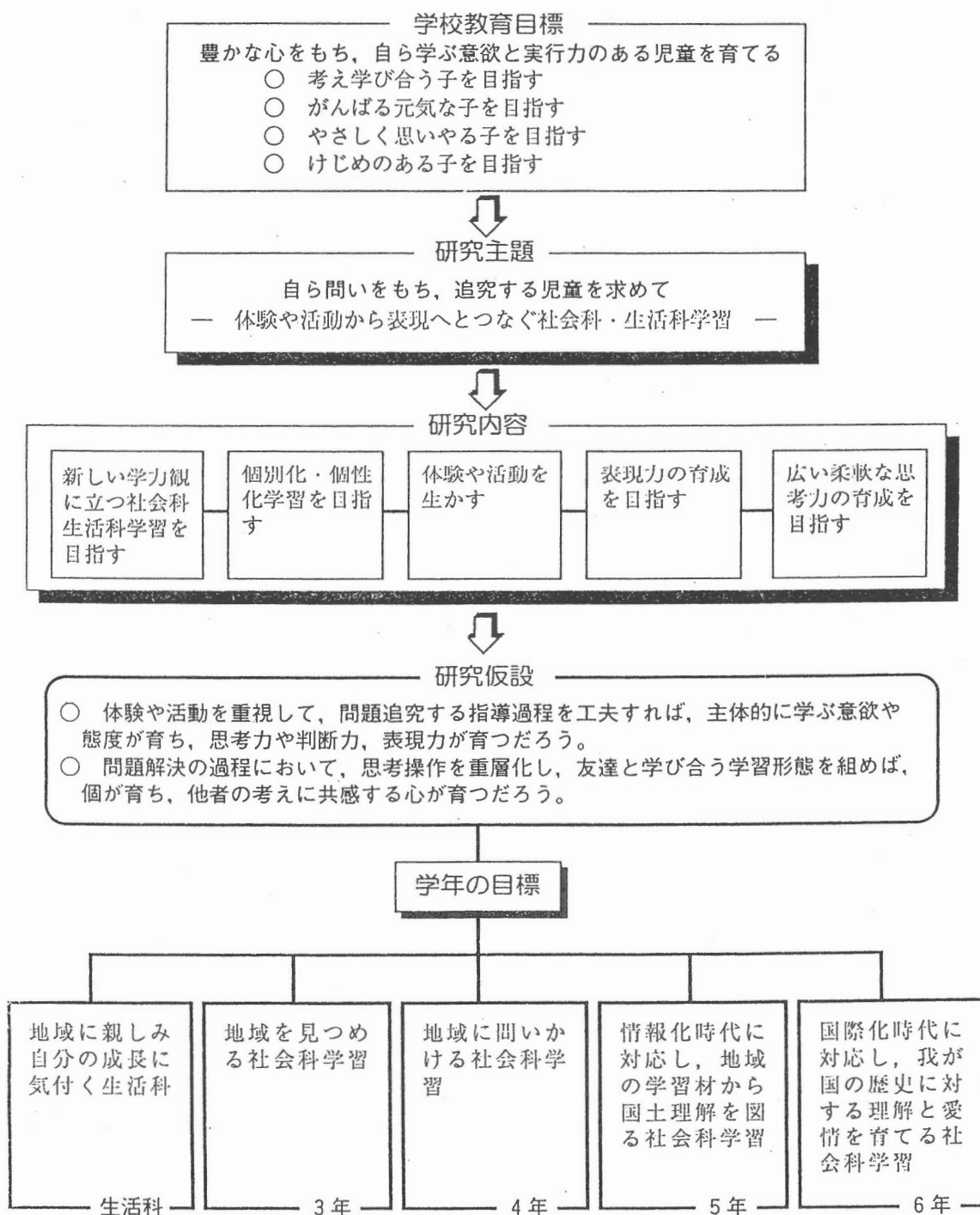
児童の考えることには、いつもすてきな夢や願い、楽しい想像がある。その広い柔軟な思考力は、やがて新しい時代を生き抜く活力となるであろう。新しい学力観に立つ教育とは、児童が心豊かに生きようにする教育でもある。

新しい教育の展開においては、思考力を重視しなければならない。児童が進んで自分の考えに基づいて、問いを見つけ、それをよりよく解決したり、実現するために考えたり、工夫したりできる資質や能力を獲得するよう努めたい。

(5) 表現力の育成を目指す

調べ学習が充実したものになり、自分なりのものの見方・考え方ができてくると、次には、それを何らかの形に表現することが必要となってくる。それは、表現する行為そのものにその子なりの学習に対する意欲や思考が表れるだけでなく、学級の他の児童との交流を通して、さらにその見方・考え方を広げたり、深めたりすることにもつながる。そこで、単元の授業展開の中で必ず表現活動を設定し、様々な表現方法を取り入れる。そのためには、表現力の育成を目指す必要がある。

3 研究の全体構想



4 実践に当たって

(1) 価値ある教材に — 学習材（活動材）の発掘 —

新学習指導要領は、これからの社会において、児童一人一人がよさを発揮して心豊かに主体的、創造的に生きることができる資質・能力の育成を基本的なねらいとしている。そのためには、児童自身のものの見方・考え方、感じ方を大切に、個性や創造性を発揮していくことができる資質や能力の育成を図らなければならない。

このような教育を進めるに当たっては、教材選択の在り方が重要となる。すなわち、児童一人一人が興味・関心をもち、働きかけていくことのできる教材、つまり、学習材の発掘が必要となる。

夏の研究集会の5年生の提案授業『「日本の水産業新時代」 — 日本の水産業に夢を —』では、庵治港の具体的事象を取り上げて、日本の水産業の問題に関する自分なりの問いをもち、思考操作の学習を展開する中で、論証する力を育成しようと試みた。

本大会でも、様々な学習材を発掘してみた。

1年・・・「浅野の丘のおはなしをつくろう」

2年・・・「子どもひょうげ祭りをしよう」

3年・・・「小菊を作る町、香川町」

「香川町の人々の暮らしを変えた道」

4年・・・「浅野の土地を開いた矢延平六」

5年・・・「伸びゆく日本の物流」 — 空飛ぶ香川の特産品 —

— 日本の物流新時代 —

6年・・・マイホームタウン香川 — 「わたしたちの暮らしと政治」 —

自ら学ぶ児童の育成は、児童一人一人が関心をもち、よさや可能性を生かしてかわり、それを高めたり、豊かにしたりすることができる教材、つまり、身近な自然、社会、文化、人間などとのかわりを通して図られる。

したがって、『小学校指導書 社会編』にあるように、「実物や本物を直接見たり触れたりする機会をもつ」ようにし、「観察や調査などの結果は具体的に表現させるようにする」ことを重視した学習指導を構築

していきたいと考えて実践してきた。

しかし、「学習材」だけではその学年の発達段階に即した基礎的・基本的事項や内容を習得できないこともある。そこで、「学習材（具体事象を基に学びの能力を育成する教材）」と「典型材（一定の概念を得る教材，教科書も含む）」の組み合わせによる単元構成が重要となる。

（2）操作の層的発展

「問い」と「論証」の調べ学習では，調べ方法と表現方法の組み合わせによる思考操作の学習を重視している。『新学力観に立つ社会科授業』（香川県小学校社会科教育研究会）には，思考操作の類型として，「類別思考」「関係思考」「条件思考」が提示されている。第1段階の操作，第2段階の操作，第3段階の操作を経て，比較，分析，統合などの思考を働かせることにより，「基礎・基本の内容」が把握できると考えて，指導過程を工夫した。

また，思考は，必ず表現を伴うので，表現物が単元の終わりにできるのではなく，児童の思考の過程に添って次々と累積されるように努めている。調べが進んだり，児童相互の交流や，教師の働きかけによって情報が増えたり，思考が深まったりしていくが，そのことが表現物の中に残されていくよう，色を変えて表現を加えていったり，ポストイットなどのカードを利用して，思考の加筆，修正の跡が残っていくようにしている。

このような思考の層的発展を考えていくと，そこにも，「学習材」と「典型材」の組み合わせによる単元構成が必要となってくる。

（3）「個を生かす学習」から「個が生きる学習」へ

新しい学力観に立つ教育では，児童一人一人の個性を大切にした学習が展開されなければならない。そして，「自ら学ぶ児童の育成」を図るなら，「個を生かす学習」から「個が生きる学習」へと転換を図っていかなければならないと考える。

そのために，教師は従来の教師主導型の授業を改め，児童主体の授業

を構築していかなければならない。そこで、児童のよさを認め、そのよさを生かし伸ばしていくための教師の役割について、支援と援助という活動で考えてみた。

従来は、指導案上には「指導上の留意点」として教師の指導したいと考えている方向が提示されていた。しかし、新しい学力観に立つ授業では、児童主体の授業を構築していくのであるから、教師は、児童の思考や活動をより発展させていけるよう支援したり、援助したりしていかなければならない。児童の主体性が強くなればなるほど「個が生きる学習」へと変わっていくだろう。

本校では、この支援と援助を次のように考えて研究を進めている。

支援とは、児童が教材に働きかけ、「基礎・基本の事項」や「学び方の習得」をねらうことを支える教師の働きかけをいう。活動の見通しを助言したり、進むべき方向を指示したりしながら、確かな思考力や判断力を練り鍛え、個の特性に応じた表現方法が選択できるよう働きかけていくのである。

一方、援助とは、児童の学習材に対する主体的な働きかけを助けることをいう。したがって、学習環境や学習条件を整備することも援助と考える。

児童は、一人一人顔が違うように社会事象に対する認知のスタイルが違う。「個が生きる学習」を展開するには、児童一人一人の個人差を理解することから始まり、個々の社会事象に対する認知スタイルと課題解決に向けた学習スタイルがうまく噛み合っていかなければならない。そこでは当然、個によって取り組む学習材が異なっていたり、活動スペースが多様化していくことが望まれる。

こうした新しい授業形態に対応した教師の支援・援助の在り方の一つとして、チーム・ティーチング（協力教授）がある。本校では、学年団でチームを組んで指導に当たる方法を検討している。社会科において、より「個性化」を指向する際、教師の個性の発揮も大切にしたいと考えているからである。しかし、適切なオープンスペースの確保の問題や、教材開発、指導計画の見直し等課題も多く、今後の研究に託したい。

(4) 開かれた学校づくりを目指す教育課程の創造

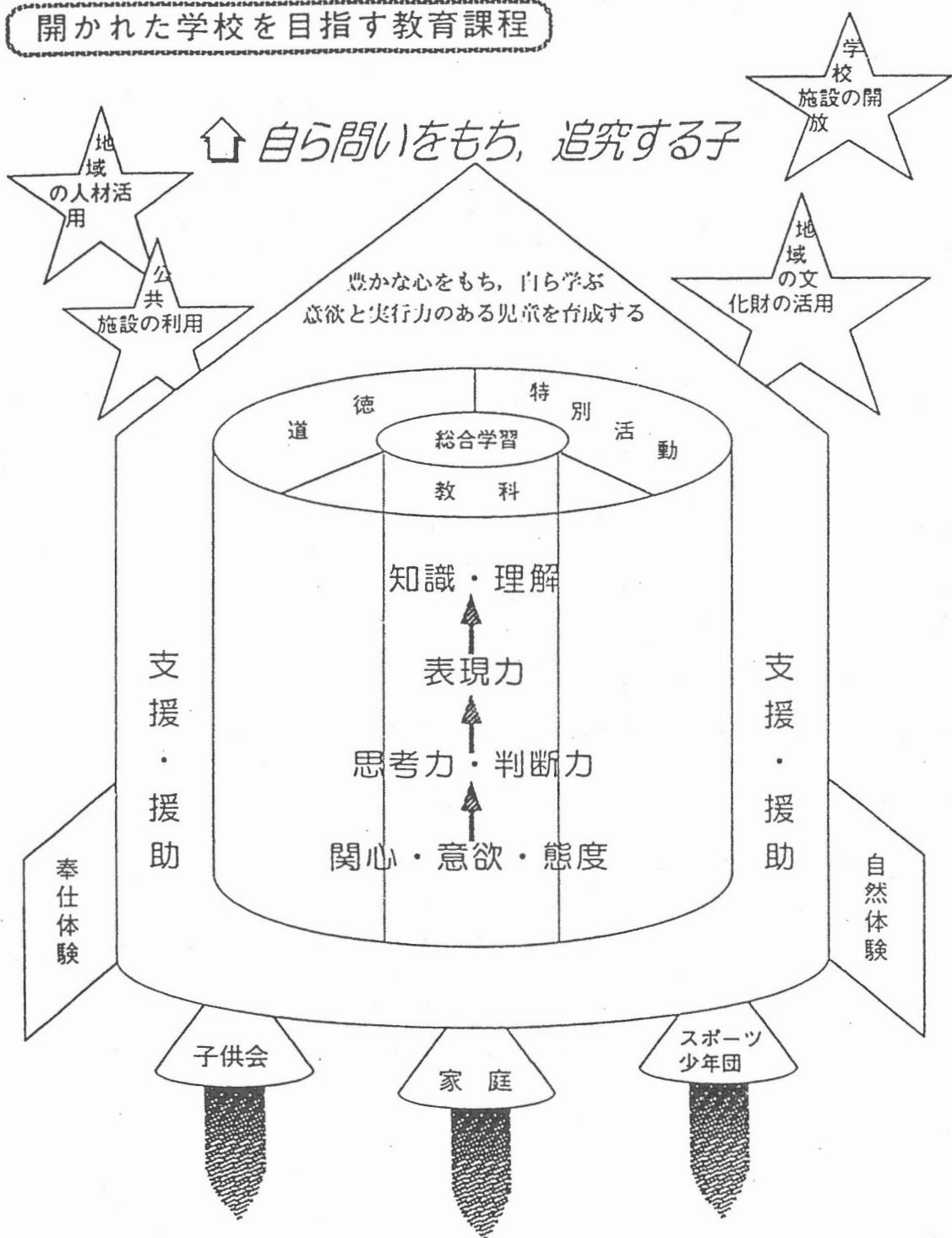
児童の日々の生活は、学校、家庭、及び地域社会の3つの場を中心に展開されている。学校は、家庭や地域社会とともに児童を育てるという観点に立って、それらとの連携を一層深めることが求められている。また、今後学校5日制の本格導入にともない、家庭、地域社会との新たな連携の視点として、開かれた学校づくりを目指す教育課程の創造が急務となってきた。

開かれた学校づくりを具現化するためには、児童の生活を場や時間によって輪切りにしてとらえるのではなく、学校内外での生活認識を区別することなくとらえていかなければならない。そして、そうした児童の生活意識の連続性に対応できる教材の発掘が必要となるのである。

地域の自然や文化や人々の暮らしについて学習したり、地域の施設を積極的に利用したりする「学習材の発掘の必要性」については、先に述べた。同時に、具体的な体験や活動を重視する学習を試みることは、その後の学習や生活の中で生きて働く力となると考えている。そこで、現代の児童の体験不足の問題ともあわせながら、教科・道徳・特別活動の枠組みにとらわれず、生きて働く能力の育成を目指す総合学習を教育課程上に位置付け実践に取り組んできたところである。

総合学習の推進に当たっては、児童の公共施設の利用の実際を掘り起こしたり、地域の文化財とのかかわりを取り上げたりすることが考えられる。また、児童の日常生活を支えている地域の人々を招いての交流活動などを計画し実践してきた。第6学年の取り組みを例にとってみると、昔の道具を調べることから先人の知恵や思いに気付き、文化や伝統を継承していこうとする児童の育成を目指している。そのために、郷土資料室と連携を図ったり、地域の人材を招いて話を聞いたりする活動を経て、児童自らの手で校内に浅野博物館をつくろうと考えた。

開かれた学校を目指す教育課程



6 年 総合学習年間指導計画

総合学習テーマ ふるさと発見，子供浅野誌をつくろう

月	単元名	主な学習活動	社	国	音	図	学	道	ゆ
4	浅野の歴史を調べよう。	○浅野にはいつごろから人が住んでいたのか調べる。	○						
		・縄文土器を作る。				○			
5		○浅野の古墳について調べる。	○						
		・分かったことを作文や模型に表現する。		○		○			
6		○新池ができるまでの様子について調べる。	○					○	
		・新池物語の脚本を作る。		○	○				
7		○浅野小学校ができたころの様子について調べる。	○						○
8									
9	浅野博物館をつくろう。								
10		○昔の道具を集める。							○
		○道具について調べる。							○
11		・道具について説明を加える。		○		○	○		
12		・昔の人の思いを展示の方法に付け加える。		○				○	
1	子供浅野誌にまとめよう。								
		○浅野の歴史や人々のくらしについてまとめる。	○						○
2				○					
3				○					

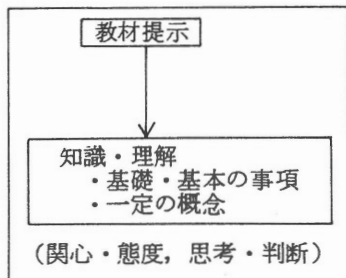
新しい学力観に立つ社会科学習

－ 問いと論証の調べ学習の展開 －

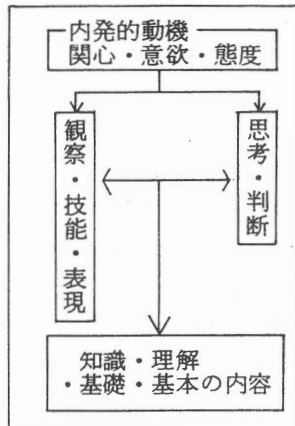
～ 思考操作の深化を図る社会科学習を求めて～

(1) 新しい学力観と調べ学習

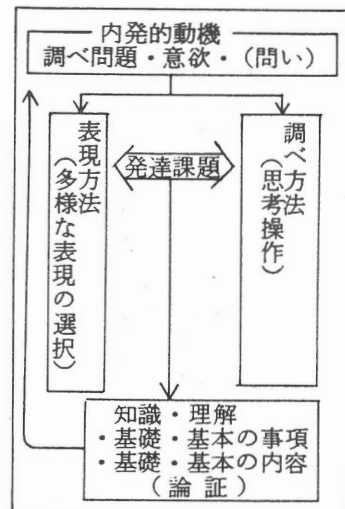
(今までの学力観)



(新しい学力観)



(調べ学習の学力観)

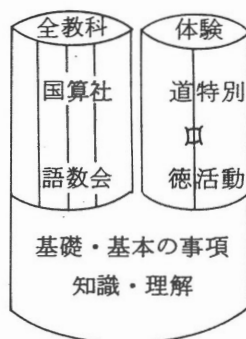


(2) 個性を生かす教育を推進する教育課程の編成

- ア ① 子供が自分の伸びていく姿を見つめ、自分の「よさ」を認識する。このことを子どもが大事にしていることに共感し、援助する教師によって「個性を生かす教育」が可能になる。
- ② 個性を生かす教育は、子供が自分の足で正しい道をしっかりと歩き、逃げやごまかしをすることなく、困難なことに負けず、常に相手の立場に立って堂々と生きていくことを目指す。
- ③ 個性を生かすための基礎・基本という考えに立つ。

イ 教育課程編成の3類型

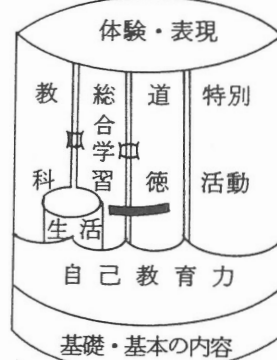
基礎基本を重視した編成



学ぶ力の育成を重視した編成



個性を生かすことを重視した編成



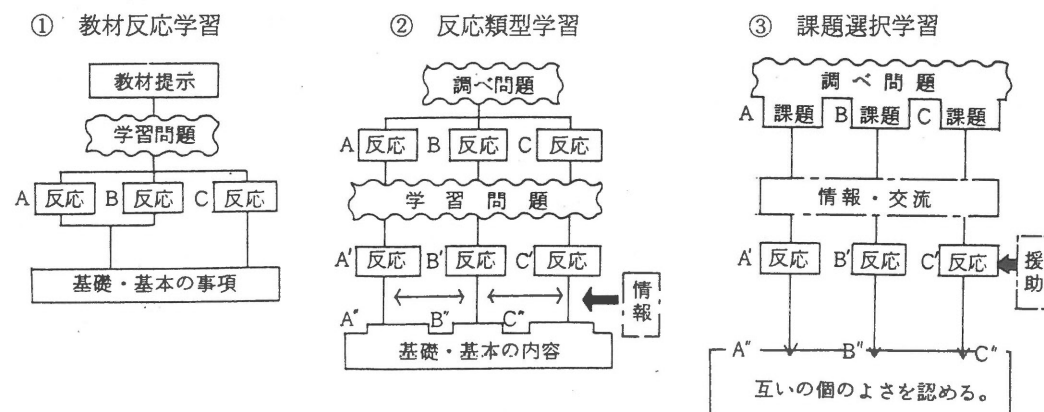
自己実現を図るには生活科で培った自己認識の芽をどう中学年、高学年に発展、継続させていくかということから、個性を生かす教育を推進していくには教育課程の中に総合学習の位置づけが大切になってくる。

(3) 新学力観と授業改善

ア 新しい学力観に立つ教育は、次の3つの授業の類型による授業改善によって進めることができる。

イ 授業の3類型に応じた自己評価と他者評価とそれに伴う援助のありかたが課題となる。

授業の3類型

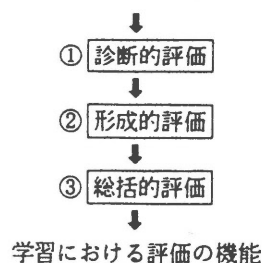


(4) 新評価観の基本的な考え方

学習評価を機能的に分類すると、次の図のように3つあることが広く説明されている。この3つの評価は、発展的で相互に関係しあっている。「診断的評価」から「形成的評価」へ、そして「総括的評価」への過程は、1時間の学習でも考えられるし、単元全体の流れでも考えられよう。

ところで、従来の評価、3つの評価のうち学習の事前的・準備的评价としての診断的評価と、一つのまとまりのある学習が終了した時に学習の成果を総括的に行う総括的評価とを主として、それも、ペーパーテスト形式が中心の評価を行ってきた。また、形成的評価にしても、指導に役立てる教師サイドの評価が主流であった。新学力観、評価観に立つ場合、どうしても認知の形成過程における子ども側に立つ評価が強く望まれるところである。

以上、延べたことから、まず、「評価の仕方のどこが変わったか」について5項目あげておきたい。



- ①ペーパーテストだけの評価から、学ぶ力（意欲・思考力・表現力・判断力等）を評価することへ
- ②結果の評価から学習の過程を評価することへ。
- ③点数などの数量で計る評価から、子どもの活動・体験・表現物などで観る評価へ。
- ④一時的な点の評価だけでなく、継続的な線や他と関連づけた面の評価へ。
- ⑤指導に生かす評価・子どもが自己を固定的に観る評価から、自己の伸びを自覚し、自他のよさを認め合う評価へ。

ただ、これらは、従来の評価の仕方の積み上げの上に成り立つものであろう。しかし、これら5項目を貫く特質は「形成過程における自己評価の在り方」である。以下、このことについて述べることにする。

ア 形成過程における自己評価

社会科授業は、社会事象についての見方や考え方を深めつつ、社会的な基礎的・基本的内容を認知していく過程を通る。この認知の過程、概念を形成する過程は、次の図で示す ア 自己評価 イ目標値 ウ援助・支援・相互交流の3つの事項で説明することができる。

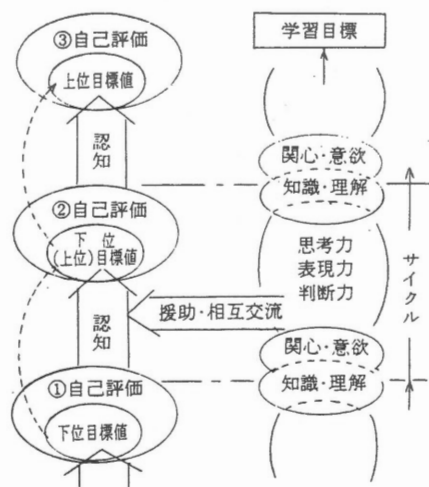
図を説明しよう。まず、既有的知識や能力をもとに、意欲をもって、新しい社会事象に取り組み、自分の考えをもつ。これを自己評価①としよう。そして、どんなことを調べたり分かっていたりしたいのか目標値（上位）に向かって、学習を展開する。その認知の過程で、思考力・表現力等を働かせたり、教師の援助や相互交流を働かせたりして、自分なりの認知に到達していく。その過程が自己評価②となる。こうして、次なる目標値（上位）へと発展していくのである。

次に ア、イ、ウ の3つの事項についていくらか補説しておくことにする。

〈自己評価〉子どもが自らの学習の過程で、基礎基本や学び方について自分のよさや伸びを確かめる評価である。

〈目標値〉自分のよさや伸びを自己評価する過程で、意欲をもって学び続けるために、自分をより生かし伸ばそうとして、相互交流や他者評価によって、今より、いっそう上位の目標を自分で設定する。この価値ある目標を目標値とする。

〈援助〉子ども自らが自己評価を連続させ、目標値を高めながら学習を進めていく。その折り、情報を選択できる環境づくり、思考操作の新しい視点、表現技法のヒント、個に応じた学習の手引き等によって、子どもの活動を援助するものである。



（形成過程における自己評価）（新学力観に立つ学習）

イ 自己評価の仕方

自己評価の仕方として、次の3つが考えられるが、広く一般的にとられているのが「自己評価カード」等によって、項目ごとにチェックしていく方法である。しかし、他の2つの方法について、今後、重視する必要がある。

①自己評価カードによる方法

②絵や文など表現することによる方法

認知の過程において、表現しながら思考し、思考しながら表現することからして、最も自己評価に適した方法といえよう。表現には、絵を主体にしたものとしては（続き絵、紙芝居、絵話等）、文としては、（作文、新聞、物語、解説文等）、また、目標や反省文を書く等多様であり、情報化社会においてコンピュータやビデオの活用による表現もある。

③学習環境を整えることによる方法

学習環境を整えることで、一つは、情報の整理がある。多様な情報の中から活用し、学び方を自己評価する方法である。また、一つは、グループで対話しやすい環境をつくり、相互交流によって自己評価をする方法である。

自己評価を中心に述べてきたが、とにかく、学習者側に立ち、子ども一人ひとりの可能性がよさを伸ばす評価へ質的な転換を図っていかなければならない。

以上、新しい評価観を整理すると、次のようになってくるのである。

・学習評価の分類

ア	イ	ウ
診断的評価	形成的評価	総括的評価
・指導計画立案のため実態	・学習の形成中の評価	・絶対評価
・学習指導上の診断		・相対評価
		・個人内評価
・自己評価（援助）		

・評価の原則

ア 評価は、「正解」が一つだけの評価でなく、「正解」にさまざまあり、「正解」そのものが個によって中身が違うことを重視する。

イ 評価は、結果としての知識・理解・技能だけでなく、そこに至る過程を重視する。

・自己評価

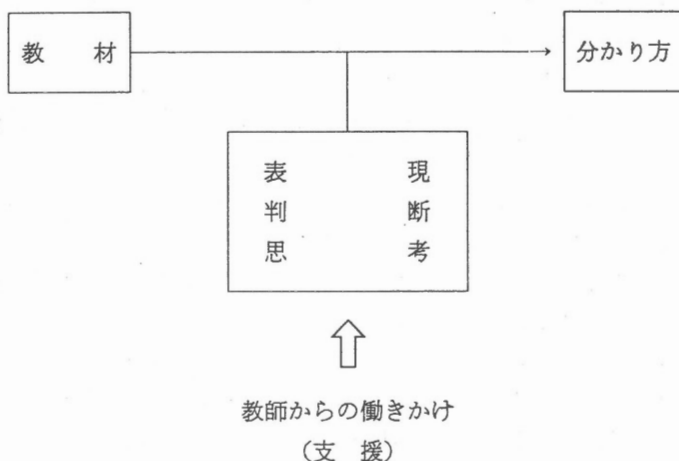
ア 自己強化のメカニズム、自己感情の喚起によって、内発的動機づけを高める。

イ 自分がどのような情報処理の仕方をしているかを知り、自分の学び方を意識化する。
自分の目標値をもち、自己調節、自己統制、自己伸長を可能にする。

ウ 教師は、指導上欠かせない他者評価の情報を提供するとともに、自他の交流による他者評価を用いる。

教師の役割としての支援・援助活動

支援

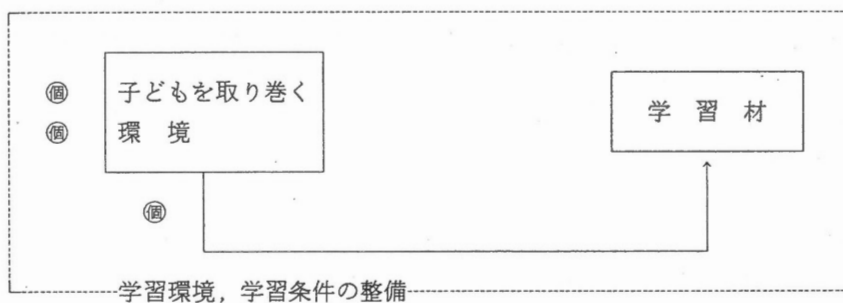


支援とは、子どもが教材に働きかけ、教材に対しての分かり方、すなわち、子どもが分かっているための教師からの働きかけをいう。

基礎・基本の事項の徹底や学び方の確実な習得をねらうための支援である。

教師は、子どもの教材への反応、教材の分かり方を見極め、支援をしていくのである。

援助



援助とは、教師の子ども理解を基盤に、子ども相互または、子どもと教師で学習材に対しての主体的な働きかけをいう。

子供が学習環境に働きかけていく中で、子どもを取り巻く、学習環境、学習条件を整備することである。

教師は、子どもの創意を生かした自他の学び方や考え方のよさを認めつつ、個性化を図っていくことが援助の教育となる。

1. 新しい学力観と教材

新しい学力観に立つ授業は、学ぶ意欲をもって思考・表現・判断などの能力を育成し、結果として、基礎的・基本的内容を獲得する授業を言うのである。

そして、この能力育成を重視した教育の改善が今、各地で実践されているところである。

ところで、この新しい学力観に立つ授業についてであるが、従来の知識・理解中心の変わってないのが、取り扱う「教材」であり、「教材の考え方」である。

確かに基礎・基本の内容を獲得していくことを重視した授業においては、教科書教材を典型材として重視してきた。このことは、大変重要な「教材」の一面である。

しかし、新しい学力観に立つ能力育成を重視した授業においては、思考力・表現力・判断力を育成するそれにふさわしい「教材」の考え方が成立しなければならない。

子どもが意欲をもち、個の能力に応じた取り組みができる、より具象性のある「教材」が必要なのである。この教材を学習材と呼ぶことにしよう。

すなわち、教材を「典型材」と「学習材」とからみていこうとするものである。教育事典によると教材とは「一定の教育目的を達成させるために選択された教育の具体的内容、文化的素材であり、あるいは、それを学習に適するように再構成し直したもの」と定義されている。

こう考えてみると、「典型材」は、一定の概念を得る教材であり、「学習材」は、具体事象をもとに学びの能力を育成する教材であり、内容的には「地域性」「生活性」「文化性」をもつこと、方法的には、「学び方・操作方法」を工夫することができることが要件であると考えられる。

そして、授業は、この「典型材」と「学習材」との組み合わせにより成立すると考える。

最後に、個を生かし、個の能力に応じた学習材にしていくための、要件をあげておくこととする。

① 教材のままの提示では、個の能力に応じた取り組みはできない。	個が問いかけ、働きかける学習材になっているかどうか吟味することが重要
② 学習材になるか、どうかの条件の吟味 が大切（地域性、生活性、文化性）	
③ その学年の発達段階をふまえた教材の 吟味、学習材への加工	

2. 操作の層的発表

「問い」と「論証」の過程を重視する調べ学習では、これまで述べてきたように、調べ方法と表現方法の組み合わせによる思考操作の学習を重視している。

5年単元「日本の水産業新時代」－日本の水産業に夢を－の授業を例にみていくこととする。

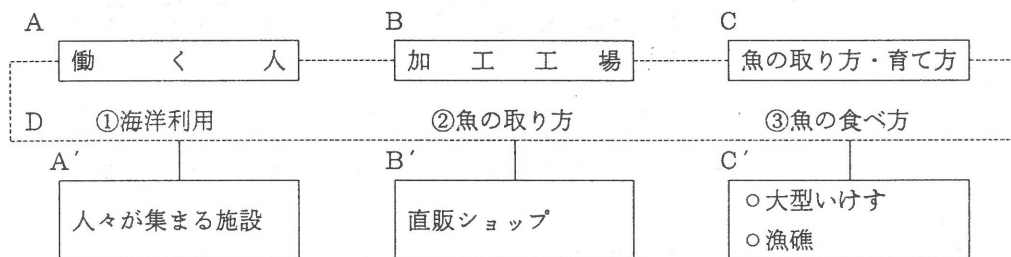
(1) 第1段階の操作

本時の学習は、これまでの学習を基に、「日本の水産業を夢のある産業にしよう。庵治の漁業を盛んにすることから、絵や文カードにして考えよう」という課題が生まれている。

第1段階の操作は、A・働く人、B・加工工場、C・魚の取り方・育て方のグループごとにノートに調べている内容をカード化し、情報を収集していく操作である。

A・働く人のグループは、新たなDの①～③の観点とつないで、単に漁船の機械化の向上に

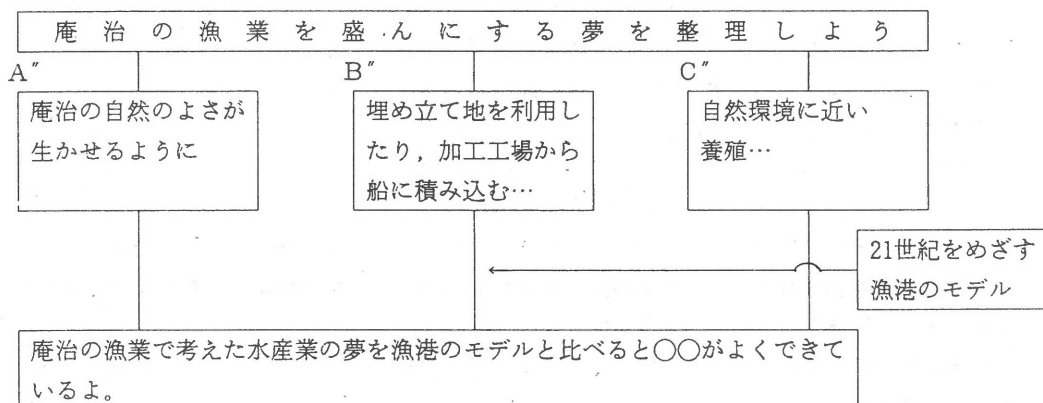
よって仕事 became 楽になったということだけでなく、魚の取り方、漁具の著しい進歩とつないで、カードに整理していくのである。〔学習材による操作〕



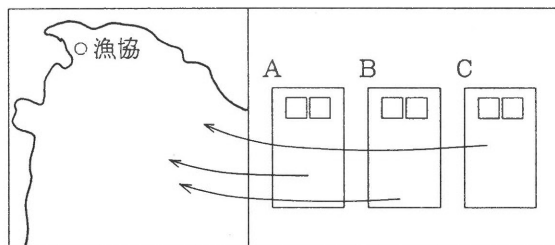
(2) 第2段階の操作

学習活動2 課題解決に必要な情報を整理して、絵図に表す操作である。

子どもたちは、操作課題「庵治の漁業を盛んにする夢を整理しよう」という課題意識のもと、グループごとに情報を選択し、庵治の漁業をさかんにする工夫をノートに書いていくのである。さらにノートをもとに、他グループと交流しながらグループごとに絵や文のカードを作成していくのである。〔学習材による操作〕



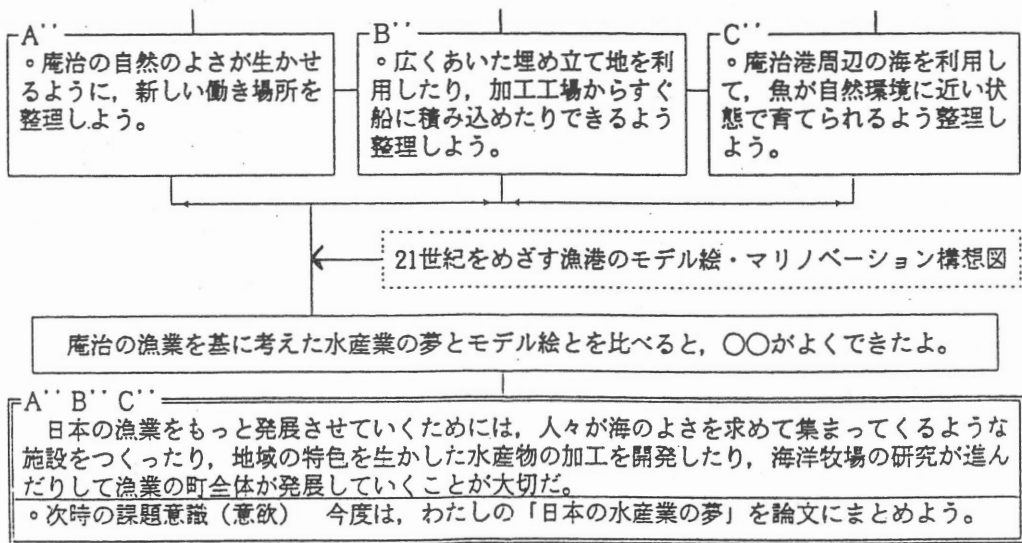
さらに、作成した絵や文のカードを庵治の絵地図にはり、3つのグループごとに調べてきたことを1つにまとめていくのである。



3つのA・B・Cのグループごとに、カードを分類、比較、総合の思考力を駆使しながらはりこんでいく。

(3) 第3段階の操作

学習活動3 「庵治の漁業をさかんにする夢の絵図」と「漁港のモデル絵」を比較して、自分たちが構想した夢の絵図のよさを見付ける操作である。〔典型材による操作〕



ここでは、類別思考が中心に働く。自分が作成した夢の絵図とモデル絵を分析し、比較することで、これまでの調べをもとにした夢の絵図のよさを自ら見付けていくのである。

このように、操作が発展する中で1と2の操作が「学習材」によるものであり、3の操作が「典型材」によるものであることから、3つの操作を経て、「基礎・基本の内容」を把握することができるのである。以上のようなことから、操作の層的発展を考えていけば、学習材と典型材の組み合わせが必要となってくるのである。

以上、思考操作の重層化について述べてきたが、新しい学力観に基づく学習指導案として、学習活動の後半部にまでも、こどもの反応を生かしつつ、反応を組織化し、従前よりも深く追求できるよう配慮していかなければならない。

思考操作の層的発展を取り入れていくことは、新しい学力を形成していく上で重要なポイントとなるのである。

